



けいどろって知ってますか？そうそう、警官役と泥棒役に別れて、追いかっこをする遊びのことです。

え？ それだけじゃないのか？ 鬼ごっこ大して変わりがない遊びじゃなかったかって？
ああ、場所によって色々とルールが違うのかもしれませんが。

僕らの所のけいどろは、こんな感じでした。まず、「警官」と「泥棒」に別れる。ここまでは一緒ですけど、他にも決められたルールがありましたね。

例えば、警官が泥棒に触れると、泥棒を捕まえたことなる。捕まえられて「囚人」となった泥棒は「牢屋」と呼ばれる場所に入る。この牢屋は大体2メートルぐらいの正方形の線で、路地にチョークで書いたり、公園の砂場に小枝を使って書いて作るんです。

それで、囚人はその中から外に出てはいけないんですけど、他のまだ捕まってない泥棒が牢屋に入って囚人に触れると、囚人は牢屋から脱走して泥棒に戻ることができるんですね。

だから警官は、追いかける役と、牢屋の見張りをする役とに分かれる必要があるんですよ。そうやって、警官が全部の泥棒を捕まえるまで、ゲームは終わらないんです……。

あれは小学校三年生の夏休み、8月15日の夕方の事、忘れもしません。あの日もいつもと同じようにいつもの古い住宅街で、僕らと中田、鈴木、吉本の三人のクラスメイトは色々な遊びをしていたのです。

でも、夏休みは長いものですから、その日いよいよ遊びのネタが切れてしまったんですよ。次は何をしようかと、誰も住んでいないボロ屋の前で考えていた時、別のクラスの田淵が僕らの方へ近づいてきました。

田淵は虐められっこでした。小さくてひよろひよろとした体つきと眼鏡に加え、いつも俯き加減で何かに怯えているかのような態度が、いじめっ子達の格好の的でした。僕らとて例外ではなく、弱々しく「遊びに混ぜて欲しい」と言う彼を見て、新しい遊びを思いついたのです。

僕らは田淵と遊んでやる条件として、けいどろで遊ぶこと、そして、警官は田淵、泥棒は僕ら四人でやることを提示しました。

「ありがとう！」

友達として遊んでくれるということそれ自体が、田淵にとっては非常に嬉しいようでした。

そして、田淵を加えた五人でけいどろを始めました。田淵は見た目によらず意外と足が早く、太っちょで足の遅い中田や運動音痴の鈴木を、あっという間に捕まえました。

ですが、先ほども言ったとおり、警官は追う役と牢屋を見張る役の二人が必要なのです。この場合も、田淵が僕と吉本を探している隙に僕が牢屋へと近づき、中田と鈴木を脱走させました。

なぜ、僕らは田淵とけいどろをやろうと思ったのか、お分かりになると思います。田淵一人に対し、僕らは四人。いくら田淵の足が早くても、牢屋を見張る役がいなければ、先ほどの僕のように誰か一人が隙をついて脱走させてしまいます。

その時もそうでした。田淵が頑張っても僕らを捕まえても、誰かが見張りのいない牢屋へと向かって、振り出しに戻ってしまう。田淵にとっては完全に不利な状況であり、それを僕らは楽しんでいたんです。

田淵も怒って帰るなりすればよかったのですが、僕らがからかえばからかう程、彼はどんどんムキになりました。その内、田淵も疲れてきて、なかなか僕らを捕まえられなくなってきました。

肩で息をしている田淵を、僕ら四人は車道を挟んだ公園の入り口の前に立って大声ではやし立ててやりました。

田淵は顔を真っ赤にして、涎が喉から溢れるような怒りの声を上げて、僕らの方へ走ってきました。

その時です。

丁度車道を走ってきたトラックが、田淵をはねてしまったんです。

田淵の身体はまるでバレーボールのように飛び上がり、近くにあった家の壁にぶつかりました。ボゴン、という鈍い音でした。力なく壁にもたれる田淵の頭からは、赤黒い肉の塊がしたたり落ちていました。

「田淵君は僕らを見つけると、自分から走ってきたんです」

先生や警察に対して、僕はそう答えました。どうせ田淵は死んでいるのだから、それぐらいのウソは構わないとその時は思ったんです。

始業式の日、校長先生が田淵の話をしてしましたが、別に悲しいとも悪いとも思いませんでした。僕以外の三人も、それ以外のクラスメイト達も、皆同じような感じでした。

でも、あの時罪悪感を感じる気持ちが少しでもあれば、ひょっとすると、こんなことにはならなかったのかもしれない。

鈴木が死んだのは、それから一週間後のことでした。閉店したラーメン屋の前に倒れていたのを、近所の人が見つけたそうです。確か死因は心臓発作だったと思います。

丁度車道を走ってきたトラックが、田淵をはねてしまったんです。

田淵の身体はまるでバレーボールのように飛び上がり、近くにあった家の壁にぶつかりました。ボゴン、という鈍い音でした。力なく壁にもたれる田淵の頭からは、赤黒い肉の塊がしたたり落ちていました。

「田淵君は僕らを見つけると、自分から走ってきたんです」

先生や警察に対して、僕はそう答えました。どうせ田淵は死んでいるのだから、それぐらいのウソは構わないとその時は思ったんです。

始業式の日、校長先生が田淵の話をしてしましたが、別に悲しいとも悪いとも思いませんでした。僕以外の三人も、それ以外のクラスメイト達も、皆同じような感じでした。

でも、あの時罪悪感を感じる気持ちが少しでもあれば、ひょっとすると、こんなことにはならなかったのかもしれない。

鈴木が死んだのは、それから一週間後のことでした。閉店したラーメン屋の前に倒れていたのを、近所の人が見つけたそうです。確か死因は心臓発作だったと思います。

鈴木が死んだことについては、悲しい気持ちになりました。彼とは幼稚園の頃からいつも一緒に遊んでいたからです。

親と一緒に鈴木に通夜にも出て、その時に鈴木を見たのですが、真っ青で頬がげっそりとこけていました。何となく、人間の死というものを理解してしまったかのような気がして、悲しさと同時に恐怖も感じました。田淵の時はそういった感情を一切持たなかったのが、今考えると不思議なことではありましたが。

でも、そんな恐ろしさも、この後の出来事、そして今の状況に比べれば、些細なことかもしれません。

それから5日後、今度は中田が死にました。コンビニにカードゲームを買いに行く途中、心臓発作を起こして死んだのだ、と言われていました。小学生が立て続けに二人も発作で死ぬのはおかしい、と親達が騒いでいたのをよく覚えています。

更に4日経った日のことでした。吉本がこういう話を僕にしてきたんです。

何でも、昨日の塾の帰り道、誰かが背後から彼を呼ぶので、振り向いてみると、死んだはずの田淵がこちらに向かって走ってきたそうです。

吉本は必死で逃げ、途中、追いつかれそうになったものの、何とか自分の家に逃げ込むことができたと言っていました。

「鈴木と中田を殺したのは、田淵の幽霊なんだ。あいつらは運動音痴だから、田淵から逃げられなかった。でも、俺は逃げ切ったから大丈夫だったんだよ」

そうやって吉本は自分の首に掛けたお守りを見せてくれました。

「近くの神社で買ったんだ、これで大丈夫！」

でも、それから三日後に吉本も死にました。自宅の近くで倒れていたそうです。おそらく、田淵から逃げきれなかったのでしょう。お守りも、効果がなかったようです。

鈴木、中田、吉本の三人が死んだとなると、次は僕です。

当然、僕の前にも田淵は現れました。

吉本が死んで一週間が経った時の晩6時ごろ、僕は母親に言われ、トイレ用の洗剤を買いに出かけました。そしてその帰り、学校裏の人気のない道を歩いていると、背後から僕を呼ぶ声がしました。

振り向くと、田淵がいました。棺に入っていた時の鈴木と同じく、青白い顔にげっそり痩せた頬、落ち窪んだ眼、そして何より恐ろしかったのが、僕を見て嬉しそうに笑っていたことです。死人の笑顔には、見ているだけで生気を吸い取られそうな恐怖がありました。

僕は一目散に逃げ出しました。運動会でも出したことのないぐらいの必死さで走りました。でも、僕を呼ぶ声はどんどん近づいてくるのです。

背中に田淵の指の先が当たり始め、諦めかけていたその時、目の前に神社が見えました。吉本がお守りを買った神社です。僕は藁にもすがる気持ちで、そこへ飛び込みました。

田淵は追ってきませんでした。そのまま神社の前を通り過ぎていったのです。

結局僕は、家族の通報で僕を捜していた警察官に発見されるまで、賽銭箱の前に座っていました。

それからも幾度ということなく、田淵に追いかけられました。その度に捕まりそうになりながら、僕は何とか逃げ延びることができました。

その中で分かったことがいくつかあります。

まず、田淵が現れるのは夜、空が薄暗くなり始めてから。

そしてもう一つは、神社に限らず建物に入れば逃げ切ることができるということです。

でも、それが分かったからといって、何の意味があるのでしょうか。田淵は僕を捕まえるまで、決して諦めないのです。今回逃げ切れたからといって、次も上手くいく保証はありません。

そして今、僕はこうやって何年も家の中に引きこもっています。あいつから逃げ回っている内に、夜だけでなく、日が暮れゆく夕方までもが恐ろしくなり始めたのです。

あいつは外ならば、人がいる場所でも平気で現れます。周りの人間には見えないのです。

彼に捕まり、他の三人とともに得体の知れない牢屋へ入れられてしまうかもしれない恐怖と向き合ってまともに生きられる程、僕は厚かましくはありません。

もっとも、このままの状態でも人生終わったも同然です。結局は、あいつの用意した二つ目の牢屋に自分から入ってしまったのかもしれませんが。

(完)